

「神仙思想」小考

竹内 肇

中国の古典籍を見ると、「神仙」とか「仙人」とか、あるいは「真人」とか、さらには、それ等が住む世界などがまことしやかに語られている場面に出会う。そこに用いられている、「神」・「仙」・「真」などの語は、本来、どのような意識で造られ、どのような意味を持つものとして考えられたのか、などの諸問題に触れることはここでは一まず避けるが、彼等は、いずれも、不老不死の存在と見なされて、秦の始皇帝や漢の武帝などの、その時々々の権力者の興味を大いに引き付けたようである。権力者達は、現世での悦楽の不朽、幽明境を異にした忘れ難き者との再会、などの願いを叶えてくれるものとして、超自然的な不老不死の存在を信じ、その境地に憧れもしたので、そのような心境は、すなわち、現世に執着する心の高ぶりによるものであるともいえよう。

現世に執着する心の底に潜むものは、無論、「死」への恐怖に相違あるまい。そう考えると、「死」を忌避することこそが何よりも肝要なのであって、それが叶えられさえすれば、「不老不死」などという意識は、最初から虚構もされなかったに違いない。権力者達も「死」が避け難いものであるとは、実は悟っていたので

あり、悟っていただけに、かえって、得られぬものを希求する心が募り、自身を真人と称したり、承露盤をささげた仙人の巨像を造る、などの行為に走ったのではあるまいか。

『呂氏春秋』（卷十孟冬紀）の「安死」には、「夫れ死なるものは、其れより萬歳を視るも猶お一瞬のごときなり。人の寿は之を久しくするも百を過ぎず。中寿は六十を過ぎず。百と六十とをもつて無窮者の慮を為さば、其の情必ず相い当らざらん」とあるが、そこでは、いかなる長寿でも「死」に比べれば一瞬の短かさに過ぎぬとし、その「死」を、たかだか百歳程の寿しか保てぬ人間が左右しようとする事の愚かしさについて説いているのである、同じく（卷二十二慎行論）の「慎行」では、黄帝の貴、堯舜の賢、孟賁の勇でも、「死」を避けることは不可能であり、したがって、「人は固より皆死す。」と断じているのである。「韓非子」の説林上篇や外儲説篇に引く説話では、荆王や燕王が不死の薬や不死の道を盲信しようとするのを家臣等が巧みに諫めているが、権力者以外の者の方が、かえって、「死」の必然性を直視し、不可避のものとして、それを、直截に、冷静に受け止めていたように思われる。

曾布川寛氏は、その著「崑崙山への昇仙」（中公新書）p.12で、『中国人の伝統的な死生観は、「礼記」郊特性に「魂気は天に帰し、形魄は地に帰す」とあるように、死後、人間は精神的な魂と肉体的な魄に分解し、魂は天に帰り、魄は土に帰ると考えたが、この天に帰るといふ魂について、当時の人々はその永遠不死を切実に信じ、昇仙図を作ったのである。』と論述する。まことにその通りなのであらうと賛同するものであるが、精神的な魂と肉体的な

魄とが分かれること自体が、すでに、「死」を意味することであるから、たとえ、天に帰る魂について、当時の人々が永遠不死を切実に信じたとしても、その意識の根底に「死」への強烈な認識があったであろうと考えることは否めないと思う。

畏友石川三佐男氏（専修大学）も『楚辭』九章の橘頌篇の意味するものについて——九章の主題の解明に向けて』（日本中国学会第三十九回大会発表資料）p.1下段で、離騷篇は「形魄の雄」がみずからの「靈魂」を求めて天上へ遊行して行く、永遠不死を願う思想を主題とする作品である、との趣旨を述べるが、ここで、形魄と「靈魂」の分離という、離騷篇についての氏の解釈からも、当時の人々に「死」への認識の強かったことは知られよう。

許慎の「説文解字」には、「僊」の字の説明として、「長生僊去」の表現が見られる。僊去の意味については、ここでは、仙去と同意義、とだけに止めておくが、長生については、不老長生と表現されて、不老不死と同一視されていることなどに注意しなければならぬ。長生とはいかに長寿であろうとも必ず終焉があるということであり、不死とは永遠の生が保証されるということなのであれば、長生と不死を同一視することはできない筈だと思われるからである。不老長生とは、恐らく、「死」が不可避であることが一層明確に意識されると同時に、「不死」は非現実的であり、実現不可能であると認識されるようになった結果、不老不死よりも合理的で納得できるものとして用いられるようになった表現なのではあるまいか。

後漢の王充が著わした「論衡」は、俗信を否定し、虚妄の言を拒絶する内容で、よく知られているが、その道虚篇では、「夫れ

人は物なり、貴きこと王侯為りと雖も、性は物に異らず。物は死せざる無ければ、人安んぞ能く仙ならん。」と、人は死を忌避できず、したがって、仙にもなることはできないと、断言している。王充の頃には人間社会や自然界の諸現象をより合理的に認識しようとする風潮が高まっていたことなども併せ考えれば、不合理な「不死」よりも合理的な「長生」が注目されるようになった理由も、理解できるようである。

後漢末に士庶人に信ぜられた五斗米道や太平道も、その神仙術的要素より、治病のための呪術が人心を引き付けたのである。現世での利益を求める人々にしてみれば「死」は最も忌避すべきものであったに相違なく、それと直接間接にかかわる病を平癒させることは最重要の願いであったに違いない。そのような人達が、「不死」よりも、より現実的な、「長生」に志向したとしても不思議はあるまい。

嵇康の「養生論」でも、「導養」の理を会得すれば数百年から千余歳迄も長寿を保てるというものの、殊更に「不死」を標榜してはいないようであるし、それを難じた、向秀の「難養生論」には、なおのこと、そのような態度は見られない。葛洪の「抱朴子」は「仙道の理論化を試みたものである」（本田清氏「抱朴子」訳注解説—平凡社中国古典文学大系「抱朴子」下段）といわれているので、その検討も看過できない問題であるが、それについては、いずれ、稿を改めて、考えることとしたい。

（たけうち はじめ・兼任・中国文化史）